

SEMINAIRE OUVERT 2003

Journal Mensuel Gratuit

No.6-25

17 juin 2003

月刊

セミナー通信二〇〇三 第六号

二〇〇三年六月一七日発行

公開セミナー 2003 『心的構造論』

藤田博史（精神分析医）

第6回第6講

「多世界論理と精神病理（その1）——多世界としての無意識」

2003年7月5日（土） 13時30-16時30（開場時間も13時30になります）

会場：日仏会館 501号室 聴講料:1000円

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 JR 恵比寿駅東口から「歩く歩道」経由で徒歩10分

主催：ユーロクリニック

協賛：ドル・フォーラム・ジャパン

問合せ先：ユーロクリニック文化部

TEL: 042-308-7637

E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT 2003

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 6ème SÉMINAIRE

samedi 5 juillet 2003 -----13h30-16h30 SALLE#501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen

LA MAISON FRANCO-JAPONAISE 10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote

Organisation:L'EUROCLINIQUE

Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements:BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637

E-mail: ys@euroclinique.com

発行
EUROCLINIQUE

編集

ユーロクリニック文化部

目次

公開セミナー第6回案内	1	ヨーロッパ美術紀行	清水由美子	8
『セミナー断章』藤田博史講義	2～5	新連載「知」のレッスン	榊山裕子	9
ピブリオフィリア逍遙遊	伊藤 敬 6	セミナー、フジタゼミ予告		10
ブレーキを踏もう	佐藤良平 7			

SÉMINAIRE OUVERT 2003

公開セミナー 2003

『心的構造論』より

「セミナー断章 2003」 第5回

講義 藤田博史

編集 榊山裕子

Le 5ème SÉMINAIRE

第5回第5講「可能世界としての心的構造---様相論理・量子論理的心的構造について(その3)」より

samedi 17 mai 2003

2003年5月17日(土) 日仏会館

(『セミナー断章』は、公開セミナーのご紹介として、講義より断片的に抜粋して掲載しています)

Trans-World Identity

夢の中に登場していた自分と目が覚めた自分というのが同じ自分なのか、同じではないのか、同じような気もするし、同じではないような気もする。つまり同一の自分だと思っている自分も同一でないような気がする。そういう同一性の問題がひとつでできます。このアイデンティティ identity という問題が、実は多世界論理、あるいは可能世界論理を語る上では非常に重要なテーマになってくるわけです。

というのも、Possible Worlds とか Parallel Worlds という論理を支えている大前提のひとつに「貫世界同一性」という考え方があるのです。英語で言うと Trans-World Identity です。

様々なワールドがある。ここに特定のF氏がいる。それぞれの世界が交通可能性、到達可能性 accessibility があるとします。W0 W1 W2 の間にそれぞれ到達可能性が成立しているとする、このW1でもこのFに相当する人物がいなければならない。W2にもFに相当する人物がいなければいけない。こういう考えです。

つまり到達可能な世界相互においては、その世界の中を一貫して登場する同一人物が必要である。こういうのを Trans-World Identity と言います。

今、わたしが夢から覚めた時に、今まで夢の中で行動していた自分と、目が覚めた時に、「ああ、今、夢だった」と言った自分というのは、たとえば夢の世界がW 1 だとします。仮にですよ、われわれが夢と呼んでいるわれわれのこの現実も、ひょっとしたら夢かもしれませんからね。とりあえず「夢」、そうするとこれは「夢のなかで行動していたF氏」、これは「目が覚めた時のF氏」、可能世界意味論に厳密に依拠するならば、こういうF氏は同一の人物である必要があるわけです。これを Trans-World Identity という風に言うわけですが、それでも、「でも待てよ、本当に同一人物か」という疑問が湧くわけです。それは何故か。現実世界のF氏は5 0 歳で死にました(+)。医学記号で死んだというのはこういう風(+)に書くのです。夢の世界の藤田氏は4 9 歳で死にました。ではこういう違いはどうするのか、ということです。厳密に一致しなくなる。

つまり Trans-World Identity がはたして Possible Worlds の存立の根本条件であり得るのか、ということです。これが分析哲学が出てきて初めの頃に、おおいに議論の対象になりました。

Counterpart

ドイツの論理学者、フレーゲ G. Frege の考え方によると、F氏というものの、これは Sinn と Bedeutung の違い、と言うのですが、Sinn というのは日本語に直すと「意義」、Bedeutung の方は「意味」となります。バートランド・ラッセル B. Russell なんかに至ってみると、これはコンテクスト context によるのだ、ということになる。

デヴィッド・ルイス D. Lewis はアイデンティティ identity ではなく、カウンターパート counterpart という考え方を導入しています。

貫世界同一性がまったくない、というのは、単なるわれわれが認識している世界に過ぎない。日本という世界があります、アメリカという世界があります、ただ当たり前のことを言っているだけです。

ただ Possible Worlds において重要なのは、同時にそれぞれの世界に同一人物がいるということです。ただその同一人物という考え方には色々な考え方があるのだということです。つまりコンテクスト上で決まっていくものに過ぎないというラッセルのような考え方もある、フレーゲのように同一人物であって同一人物でないような考え方、要するに、その「意義」においては同一だけれども、「意味」において異なるというような立場をとる人もいます。デヴィッド・ルイスに至っては、いや、それぞれがどんな年齢で死んでも一向に構わないのだ、と。つまりアイデンティティというよりは、カウンターパートがそれぞれの世界に存在しているという考え方なのです。

わたし個人は、このデヴィッド・ルイスの考え方を支持します。つまりアイデンティティというのは、厳密に、あるものとあるものが同一のものである必要はない。たとえば便所に座っている自分とテレビを見ている自分が全く同一であるという保証はどこにもない。ただその便所の便器に座っている自分と、居間でテレビを見ている自分が、ひとつのカウンターパートの関係にある、ということは言えるかもしれません。

アイデンティティという言葉が流行していますけれども、これからは、アイデンティティの代わりにカウンターパートという言葉を使っていたきたいですね。よく心理学関係の集会とか学会とか行くと、アイデンティティ、アイデンティティと言いますが、「ではあなたの言っているアイデンティティってなんですか」という質問をすると、意外とわからない。「中学校の時のあなたと今のあなたと同じあなたですか」と聞かれた時に、「同じです」と自信を持って答えた人に「証明してください」と言うと、簡単には証明できないのです。

つまりわれわれが、時間の流れのなかで同一だと素朴に信じているようなもの――想定しているわけですよ、もともと――そういうものを古典的な心理学や精神医学では「人格」と呼んでいるのです。「人格」というのは、時間の流れに左右されずに同一のものであるという考え方です。人格 character、果たしてそういうものがあるのかどうか、非常に疑問です。要するに時間の流れに沿って同一であるようなものを人格 character という。クルト・シュナイダー K. Schneider という精神病理学者が、精神病理学の本の中で定義していますが、わたしの立場は「人格」なる概念はあまり当てにならないと思っているのです。

心的現実と分析哲学

この3回で「量子論理」なんてちょっと小難しいタイトルを出してしまいましたが、この3回のセミナーのなかで、わたしが皆さんに分かっていただきたいと思っていることは、いわゆる分析哲学で従来言われてきた Possible Worlds とか Parallel Worlds とか、あるいはワールドの複数性 plurality という問題は、何を隠そう、この心的な現実こそあてはまる、ということなのです。この心的な現実こそふさわしい。つまり分析哲学者の言っていることは、ひょっとしたらデヴィッド・ルイスが言っていることも、あるいはそのデヴィッド・ルイスに反対する人が言っていることも、すべては心的な現実において語られるべきものであり、その範囲において正しいのであると。心的現実以外に現実があるかということ、心的以外の現実にはわれわれは到達することができない、という絶望的な状況にすら置かれているわけです。

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載4 頼りになる雑誌がない不幸

いま、楽しみに毎号読んでいる雑誌がない。つきあいのある編集者たちに聞いても、みな様に「面白いと思える雑誌が見当たらない」と言う。彼らにしる私にしる、仮にも出版業界の隅っこでご飯を食べさせてもらっている身分なので、これは他人事のような顔をしていられない深刻な事態なのだが、ここで実感を偽っても仕方がないので正直に書く。

仕事で必要だからという理由で、専ら情報を取るため義務的に読んでいる雑誌はある。いわゆる専門誌だ。中にはそれなりに面白いと思えるものもある。狭いジャンルを追求している専門誌の世界にも、厳然たるヒエラルキーがあるのだ。しかし私は専門誌を読んでも「雑誌を読んだ」という気がしない。その手の雑誌で得られるのは、時間が経てば価値を喪う断片的な情報だけだ。雑誌の性格上、分野外の出来事がすっぱりと無視されている反面、その分野で本質的な問題となっている事項は「言わずもがな」「今さら」と判断され、取り上げられることは滅多にない。常に予定調和的で、意外性やスリルに乏しく、読んでいるといつの間にか自分の思考に一定の枠をはめられるような息苦しさを感じる。

それでは、総合誌はどうだろうか？それらはかつて言論界と呼ばれる権威を形成した強力なメディアであったが、今時そんなものを本気で読む者はいない。しばらく前から総合誌は、前号で述べた「有名人たち」が食い扶持を稼ぐための場になり果ててしまい、彼らが自分のキャラクターを立てるためになす目立ちたがりな言論を展開するだけの。これもまた専門誌とは別種の予定調和が支配する媒体に墮してしまった。

新規に創刊される雑誌の寄稿者一覧を見るだけで、私は大概げんなりする。雑誌を新しく作るといっても、そこで何か新しいことが起る予感はなく、あるのは有名人の順列組合せにすぎない。雑誌を立ち上げる編集者の人脈を使って、有名人の書き手をどのくらい呼べるのか、有名人を幾人揃えれば読者を引きつけられるか、という「有名人獲得競争」の観点からしか雑誌作りができなくなっている。あの有名人が今度はどんな事を言うのか。有名人Aと有名人Bを組ませた対談ではどちらが上手に自分のキャラを立てるのか。そういった程度の発想しか読み取れない。読者は書き手の名前に反応するのだから、とにかく有名人をたくさん揃えなければ勝負にならない。どうせ言論の中身を気にする読者なんかいやしない。名前を知らない書き手の記事を誰が読む？これが編集者の本心だろう。

このような構造があるため、ごく一部の有名人に仕事の依頼が集中する結果となり、言論の密度はますます薄くなる。いったん有名人になってしまったが最後、読者に忘れられるのは書き手として命取りだ。一度贅沢を覚えてしまえば、もう生活の程度は落せない。偉そうな顔をしていても、物書きだって所詮は水商売だ。いつ人氣が落ちるか分らないのだから、稼げるうちに稼ごうと仕事を請けまくる。彼らも必死なのだ。一方の編集者も、使えるタマを手許に揃えておくのが商売だから、時間もカネも有名人につぎ込んで、ご機嫌取りに忙しい。新しい書き手を開拓するなど思いも寄らない。こうして二重の悪循環が加速していく。新しい書き手を継続的に発掘することによって言論

の幅を広げ、多彩な視点を読者に提示するのが編集の本道であるはずだが、実際に起きている事は正反対だ。

私は自分の思考の糧となり得る言論を常に欲しているし、そうした欲求を雑誌が満たしてくれた時代を記憶している。現在から見れば、それらは未熟で不十分な雑誌だったかも知れないが、とにかく現在の自分の思考を構成している基盤（の一部）を形作ってくれたのは、疑いなく雑誌だったのである。翻って、現在の自分が思考する時に基盤となり得る雑誌は一つも思い付かない。書店には頻繁に入るが、店頭にも山のように積まれた雑誌を見るにつけ、その中に自分が求めている雑誌が一誌もないと気付いて、暗澹たる気持ちになる。あれほど多数の雑誌があっても、それらの殆どすべてが私にとって無意味なのだ。まるで自分が状況全体から疎外されているような気持ちすら湧き起こってくる。

文化的な生活を送る者であれば、自分の立ち位置を認識することは必要最低限の義務となる。なぜなら、自分が置かれた場所を正確に把握していなければ、次の瞬間に自分が何をなすべきか決定できないからだ。本人は前に進んでいるつもりでも、実は後戻りしていたというのでは話にならない。質が高くても量的にも充分な情報と、それらを正確に処理して自分の行動を決定できる能力を欠いては、現代社会において自己を保つのは難しい。役に立つ雑誌がどこにもないとすれば、それは雑誌の作り手と読み手の双方が、自分について、ひいては社会について真剣に考えていない証左なのではなからうか。まあもな雑誌のない世の中が、果たしてまともだと言えるだろうか。選択肢が乏しいという程度なら、まだ余程ましである。事実上、私には選択肢が与えられていないも同然なのだ。

自分がこういう状態なのだから、おそらく私以外の人も私と同じような状態なのではないかと考えざるを得ない。そこいらの人々が何を思考の基盤としているのかに思いを致す時、私は言いようのない不安を覚える。ひょっとしたら、実は何も考えていないんじゃないか。なお悪いことに、彼らは自分が何も考えないことに不安を感じていないんじゃないか。そう思うと、マスコミが時おり発表する世論調査なんか信用できなくなってしまう。いっさい物を考えない人間が何か言ったとして、その発言に何の意味があるうか。

情報ソースが印刷物からネットへ比重を移したのは事実だが、かつての総合誌が担ったような言論空間がネット上で形成されているのかといえば、それは疑問だ。物事をコンプレヘンシヴに捉えるとか、具体的事実を材料として一段上の階層で考えるといった指向にネットが適していないとする見方もある。一つ言えるのは、人が物を考える基盤の中心が印刷物からネットに移ったことによって、得た物は確かに大きかったが、その一方で失った物も大きかったということだ。人は失った物の重要性を認識することはできるが、一度失った物を取り戻すのは困難である。だから時々ブレーキを踏んで、取り返しのつかないことが起きる前に、自分の現在位置を正確に把握しなければならないのだ。

しかし、その作業をやるうとしても、頼りになる雑誌がない。私はとても残念に思う。 （さとう・りょうへい 文筆業）

ヨーロッパ美術紀行

（3）ティツィアーノ＝スーパースター ―ロンドン（続き）―

清水由美子

「アール・デコ」展につられて久々のドーバー越えに同意したのだが、夫の方はむしろ他にいろいろお目当てがあったらしい。中でも「ティツィアーノ」展がナショナル・ギャラリーのセインズベリー館で始まっているという。

1999年、この同じ会場で開催された「アングルの肖像画」展を観たときの印象が生々しい。地下にある特別展専用の会場での企画展は、規模こそさほど大きくはないが、私のアングル観をすっかり変えてしまうほどすばらしく質の高いものだった。今回も目を開かせてくれる体験ができるかもしれない。金曜日は夜遅くまでオープンしているのだが、旅の疲れもあるので明日のメインメニューにするとということで合意した。

ロンドン2日目の朝、先ずはテート・ブリトンへ直行し「コンスタブルからドラクロワまで：英国の美術とフランスのロマン主義者」展を一通り観る。通常ならここからダブルデッカーでトラファルガー・スクエアのナショナル・ギャラリーに移動することになるのだが、この日はデモでバスもタクシーも通れない。否応なくイラク戦争反対のデモ参加者たちの流れに加わりミルバンクを歩く。イラクでの戦争は終盤に入っていたのでそれほど大規模なデモではないが、さすがに首相官邸のあるダウニング通り近くにはデモ隊が集結していそうだ。迂回すべくセント・ジェームズ・パークの方へ出る。青空の広がる陽気な日なのに歩いている人は少ない。にわかパトカーに変身したレンタカーが沿道に並び、中に人影が見える。

ナショナル・ギャラリーのセインズベリー館にあるチケット売り場に着いたのは正午を少しまわった頃。土曜日なのにデモのお陰でかなりすいている。通常なら長い行列ができているところだろう。それでも一時間後ほどの入場時間が指定された。上階のレストランでランチする。

ティツィアーノ。英語では Titian と書きティシアンと読む。ルネサンス期に活躍したヴェネチア派の最大の画家である。マネがかの『オリンピア』で借用した『ウルビーノのヴィーナス』（ウフィツィ美術館）などが有名だ。それ以外にも、各地の美術館にティツィアーノの作品は多い。なにしろ神聖ローマ皇帝カール5世やその息子のスペイン王フェリペ2世を含む錚々たる顧客リストを持つひっぱりだこの人気画家だったし、85歳を越えるまで大変長生きして画風を変えながら多くの作品を残した。名前が似ているからといって、同じヴェネチア派でも、ティツィアーノとは親子ほどに年の離れたティントレットや、ましてや18世紀のティエポロと混同しないようにしよう。

さて、ティツィアーノをめぐるクリシェには、色彩の魔術師、(ミケランジェロの素描に対する)ティツィアーノの色彩、魔術的印象主義、画家の画家などというのがある。また、比較的新しそうなのは、シェイクスピアになぞらえるもの。これは最大の賛辞ではないか。カラヴァッジオやルーベンス、ベラスケスに影響を与えたことも知られている。存命中から400年経った現在まで、永遠のスーパースターなのだ。どうも私のティツィアーノ認識には何か足りないものがありそうだ。

果たして期待は裏切られなかった。忘れがたいティツィアーノ体験となった。会場のサイズの制約もあるせいか、集められた作品は50点にも満たない。しかしバランス良く厳選され、ティツィアーノの全体像を

捉えるには不足はなかったと思われる。会場が小振りなため押し合い圧し合いで落ち着いてじっくり眺められないという難点はある。人の群の間隙をぬって右往左往しながらの鑑賞だが、暖かい壁の色、ほどほどのライティングが相俟って一種の親近感が醸し出されている。(対照的に、午前中に観た「コンスタブルから・・・」展会場での全体を暗くしスポットライトで絵を照らし出すという手法に腹立たしい思いをした。スライドを観ているようで不自然極まりない。気持ちが悪い。) 同美術館の所蔵する11点のティツィアーノの作品を意味のある流れに組み込み、対比の中で理解を深めることが当企画の最大の動機とカタログにある。それが最も成功し、また展覧会の呼び物にもなっているのが、フェラーラ公アルフォンソ・デステのカメリーノ(小部屋)の再現である。

マントヴァのゴンザーガ家に嫁いだ姉イザベラ・デステのストゥディオーロ(小書斎)に刺激され、アルフォンソも当代の最高の画家たちに描かせた絵で囲まれた部屋を持ちたいと思ったらしい。ラファエロの死などにより、最終的には、ティツィアーノの師ジョバンニ・ベリーニの『神々の祝祭』(ワシントンのナショナル・ギャラリー蔵)、ティツィアーノによるナショナル・ギャラリーが所蔵する『バックラスとアリアドネ』を含む3点(残りの2点はプラド美術館が貸し出している)、それにエステ家に仕えた画家ドッソ・ドッシによる1点(現存せず)の大作合計5点、それにドッソ・ドッシによるフリーズ(個人蔵、他)で飾られたカメリーノが完成した。

これが1621年に飛散して以来、初めて一同に会したのである。ドッソ・ドッシの失われた部分を空白にして2点が壁の一面に並び、それを囲むように左右の壁に1点ずつ詰め込むように置かれている。美術館の整然とスペースをとった展示に慣れている目には新鮮に映る。ティツィアーノによる3点はそれぞれの美術館で既に観ているはずだが、今回ほどに貪るように見入った記憶はない。初見のベリーニ作品はスタティックで独自の魅力を放っている。アルフォンソの目を通して観ている自分がある。

それにしても、アメリカやスペインの美術館がこれだけの作品の貸与をよくも同意したものである。これだけの大美術館となると、貸したり借りたりとお互いに便宜を図りあうのだろう。ただし、同館所蔵の有名で魅力的な『バックラスとアリアドネ』はとても旅をさせられる状態ではないとカタログにある。同展は、再編・拡大された形でプラド美術館に巡回するらしいが、そうすると今回のような完全に近いカメリーノの再現はできないだろう。ロンドン展を観られて本当に良かった。

このあとナショナル・ギャラリーの常設コレクションを覗いた。名作が目白押しだ。感動的なティツィアーノ展の余韻が残るまま、フランドル絵画やホルバインなどの作品のいくつかを丁寧に観察していくにつれ、またまた気持ちが高揚してくるのだった。

(参考)プラド美術館の「ティツィアーノ」展は、2003年6月10日から9月7日まで開催される。
(しみず・ゆみこ ブリュッセル在住)

『知』のレッスン

1 『無知』のレッスン

榊山裕子

「知識」を人に伝授することは難しい。「知恵」を人に授けることもなかなか骨の折れる営みである。しかしそれとは別の意味で困難な教授法がある。それは「無知」を「教える」ことである。そんなことは不可能である、と誰もが思うであろうこの「教授法」は、しかしそれほど珍しいものであったわけではない。

アメリカの文芸批評家バーバラ・ジョンソンは、フランス 17 世紀の戯曲家、モリエールの『女房学校』を題材として、この興味深くも厄介な問題に取り組んでいる。

「無知を教えること。おそらくこれは、ほとんどの教育者が思いもおよばぬことだろう。だいいち、構造的にも、それは不可能だ。生徒に知ってはならないと教える際、その知ってはならないことを、どうしたら生徒に知らせずにすませられるのか？ただ、なんにせよ、この難題を背負いこむことになった教授気取りの男がいた。モリエールの戯曲『女房学校』に登場するアルノルフである。」（『無知の教え』『差異の世界』青山恵子・大橋洋一訳より）

この「負の教授法」は、幼い娘アニュスを世間から隔離して無垢なままに育て上げ、やがて自分の女房にしようという中年男性アルノルフの願望である。結果的にはこの娘が同年代の若者と結婚することで、悲喜劇的な破綻を迎えることになるこの教授法は、人が「人間」として育っていくということそれ自体が、言葉を学び、文化を習得していく知の営みであるということを思えば、初めから成功する望みなどない矛盾に満ちた教授法であった。ましてやアルノルフは、言葉も礼儀も、人間の文化を何一つ身につけていない文化的に白紙の状態、狼少女のような存在を望んでいたわけではなく、ただ他の「男」からは何も学ばず、彼にのみ忠実で従順で、恋愛や性に関して白紙（タブラ・ラサ）の状態にあることを望んでいたに過ぎないのだから。バーバラ・ジョンソンが明快に指摘しているように「アルノルフの教育的配慮を背後からつき動かしているのは、教育のある妻は夫を裏切るかもしれないという恐れであった。無知こそが、貞淑を確保する唯一の方法と思われていたのだ。」こうした一見滑稽な教授法は、しかし、つい近年まで日本の「女子教育」においてなされていたことでもあった。「貞淑」な妻を作りあげるために、実際に女子教育は男性向け教育とは別のシステムでなされ、その教育内容も限定されていた。すなわち不貞を働いたり、男性に対して「生意気」な口をきくことのない女性の育成が望まれたのである。

「無知」を教えるという矛盾に満ちた行為は、知ってはならないことを空白にしておく術を教えることである。このことについて知ってはならないことを教えるということ、たとえば性愛の技術を他の男から学んではいけないということを「教える」ということは、実は「不貞」という言葉を知らない娘に「不貞」の存在を教えることであり、他の男からそれを学ぶことの可能性を示唆することでもある。しかしそれを「教える」ことなしには、それを避けることを「教える」こともできない。「貞淑」を教えることは、その囲い込みの回りに広がる「不貞」の可能性をも示唆せずにはおかないが、かといって、それを教えなければ、貞淑も不貞もなく、娘は不貞に罪悪感を抱くこともない。そこにこの教授法の厄介な側面がある。だからこそこの教授法は、教える側が望む以上の「知」を、学ぶ側が獲得することに対して、マイナスのイメージを与えることに腐心する。たとえば女性の知を「浅知恵」と呼び「女の利口より男の馬鹿」というように、女性が自分に

望まれている以上の知を発露する姿を、滑稽なイメージとして流布させることによって、その知の在り方を限定すること、そして望まれた以上の「知」を求めたり、それについて語ったりすれば、制裁が待っていることを「教える」ことが必要だったのである。かくして「無知」のレッスンとは、実際には「無知」を教えるという不可能な営みではなく、「無知」を装うこと、無知に留まることを、この世界で生きていくための「知恵」として教えこむ技術であるしかなかったのだ。こうした「限定的」な「知」の教授法は、女性に対してのみなされていたわけではなく、階級制度の元では低い階級の者たちに対して、植民地においては被征服者に対して、広く行なわれてきたことでもあった。

またこの国で近年までよく見られた風景、若者の真摯な問いかけや議論に対して、年配の男性が投げかけてきた「青臭い」という言葉には、男性が女性に対してどこしてきた「知」の抑制策とよく似た構造が隠されていたように思われる。それは、年配の男性の権力の根拠、その脆弱な「知」の弱点を論破し、いずれはその権威を覆すことになるかもしれない新たな「知」を予め封じ込め、年功序列的な制度を温存しようとするためのひとつの方策であったとは言えないか。

「青臭い」という言葉は、「知」によって世界に対峙していこうとする若者の態度を、滑稽なマイナスイメージによっておとしめ、その意欲を根底から削ぎ、腐らせてしまう。これは家父長制社会が長い間、女性に施してきた「教育」と瓜二つである。

実際、すぐれた知性の可能性を秘めた鋭敏な人間ほど、自らの存在が滑稽化されてしまうことを強く恐れるものではないだろうか。自己の在り方を常に反省する真に知的な心構えを持つ人ほど、自らの知の在り方が滑稽なものになることを恐れる気持ちも人一倍強いのではないだろうか。だからこそこの「滑稽化」はそうした真の知性を秘めた者たちによる新たな「知」の可能性を削ぐための格好な手段となったのである。

この国においては、ある時期から大人と子供の関係がポジとネガのように逆転してしまったように見える。それは若者たちの健やかな「知」が支持されたということではなく、「青臭い」という言葉のもとに封じ込められてしまった「知」が、その素直な成長を疎外されたまま腐りはて、育ちきれなかった幼児的な欲望のみが肥大化して、そうして育ってしまったかつての若者たちが、「知」を的確に用いる術を知らないまま、それをおもちゃのように握りしめて闊歩している、というような案配なのである。

それゆえ、このささやかなエッセイ＝試みにおいて、わたしはこのようなして封じ込められ、根元から腐ってしまったかのように見える「知」の再生の可能性について微力ながら考えてみたいと思う。それはあきらかにわたしの手には余る試みであることは承知しているが、今ほどこうしたドン・キホーテ的な試みを、各々が自分の足下から行なっていくことが求められている時代はないように思われるのだ。腐りきってしまったかのように見えるこの腐葉土のなかから、幸いにも新たな「知」の可能性が芽吹いているような、そんな予感も仄かに見えなくはないのであってみれば。
(さかきやま・ゆうこ 芸術評論・ジェンダー論)

SÉMINAIRE OUVERT 2003

Le 7ème SÉMINAIRE

FUJITA,Hiroshi(psychiatre-psychanalyste)

samedi 26 juillet 2003, 13h30-16h30

SALLE#501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE Frais de participation:1000yen

Renseignements:BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

公開セミナー 2003 『心的構造論』

第 7 回第 7 講

『多世界論理と精神病理（その 2）——多世界としての精神分裂病』

藤田博史（精神分析医）

2003 年 7 月 26 日（土） 13:30～16:30（開場時間も 13:30 になります）

会場：日仏会館 501 号 聴講料:1000 円

問合せ先：ユーロクリニック文化部 Tel: 042-308-7637 E-mail : ys@euroclinique.com

Séminaire Privé 通称「フジタゼミ」

藤田博史によるプライベートゼミ、通称フジタゼミが、原則として毎週木曜日に開催されています。自由発表の場

トピカ、原書講読（現在はジャック・ラカンの未公開セミナー「ル・サントム LE SINTHOME」の講読）などを

行っています。語学力、資格は一切問いません。今後の予定は随時「精神分析医 藤田博史の公式サイト」に掲載されます。

サイトアドレスは <http://www.foujita.com> です。なおインターネットをご利用でない方は、ユーロクリニック文化部

まで電話でお問い合わせください。

今後のフジタゼミの予定(変更されることがあります)

■第 50 回フジタゼミ 2003 年 6 月 19 日（木） 19:00～22:00 備屋珈琲店恵比寿店会議室（恵比寿）

■第 51 回フジタゼミ 2003 年 6 月 26 日（木） 19:00～22:00 喫茶古炉奈会議室（秋葉原）

■第 52 回フジタゼミ 2003 年 7 月 3 日（木） 19:00～22:00 備屋珈琲店恵比寿店会議室（恵比寿）

■第 53 回フジタゼミ 2003 年 7 月 10 日（木） 19:00～22:00 喫茶古炉奈会議室（秋葉原）

SÉMINAIRE OUVERT 2003 Journal Mensuel Gratuit No.6-25

月刊『セミナー通信 2003』 フリーペーパー版 6-25 号

2003 年 6 月 17 日

発行 EUROCLINIQUE

編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子

tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。